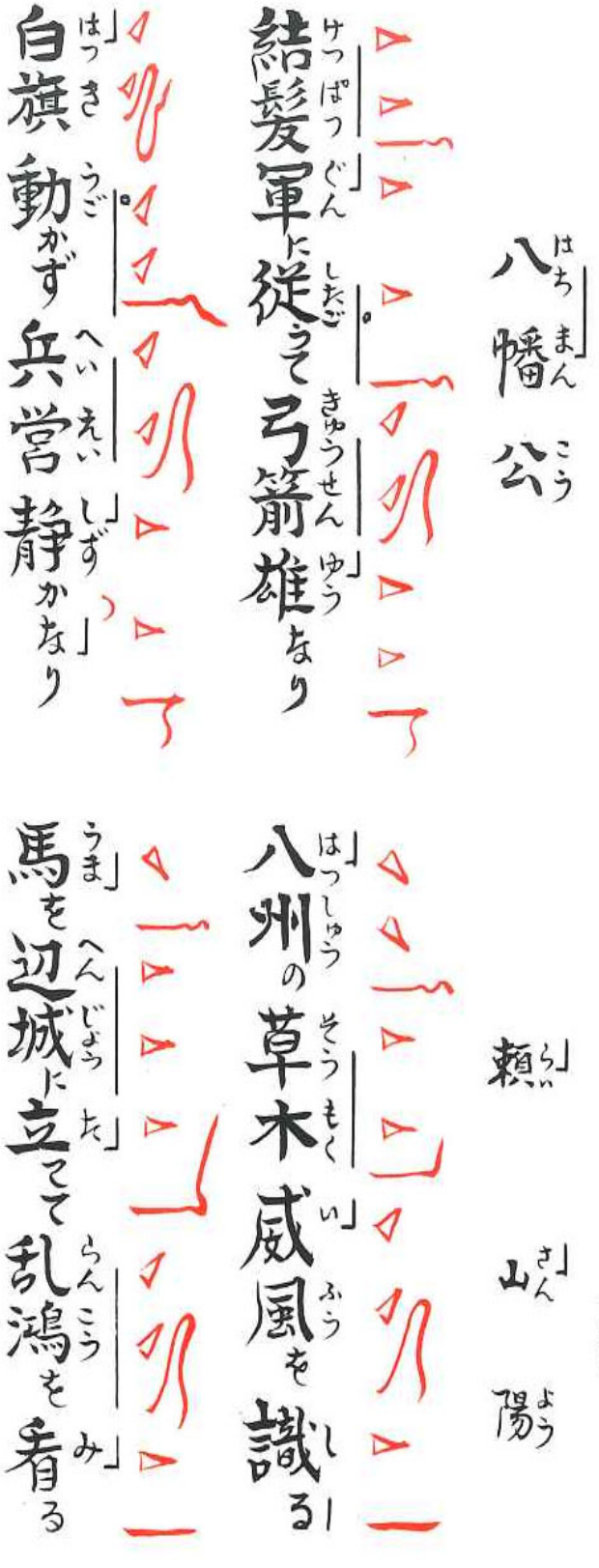

【作者】頼山陽（一七八〇～一八三二年）（安永九年～天保三年）。江戸時代後期の儒者、詩人、歴史家。詩集に『日本樂府』、『山陽詩鈔』などがある。

【語釈】＊結髪…髪をゆう。　＊弓箭…弓矢。　＊威風…威厳のある犯しがたい様子。　＊辺城…辺疆の城塞。国境の城塞

＊乱鴻…整然と列をなして飛ぶ雁が乱れ飛ぶさまのこと。雁行の乱れ。

【通釈】成人の髪型に結って以来（＝成人になって以降）、軍に付き従った武士のかしら（で）。関八州の草木は、（彼の）武威の風を知っていて（靡（なび）いている）（＝従っている）。白旗の軍勢（＝源氏の軍）は動ずることなく、静かであり。辺疆の城塞に馬を停めて雁の乱れ飛ぶさまを見ている。

【備考】◎作者が源義家の人となりとその武風をたたえて詠じた詩。（後三年の役で、源義家軍が家衡・武衡軍の籠もる金沢柵への行軍中、西沼の付近を通りかかると雁行の乱れがあり、八幡太郎・源義家が清原軍の待ち伏せを見破った故事を謂う。）

◎関八州・・・江戸時代、関東八州（関東八ヶ国）の総称。相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野。